生徒の主体的な読みが「猫」の魅力を生かす

東京都品川区立平塚中学校
寺西　裕子

一　はじめに

「猫」（注）の著者トーベ＝ヤンソンは北欧ファンタジーの傑作『ムーミン』の作者でもあると、私は最初に紹介することにしている。これを聞いた生徒たちは興味津々となって読み始めるのが常だからだ。ところが一読すると「何をいいたいのかよくわからない。」「ソフィアは勝手だ。」とかマッペの野生的な描写が残酷だとかいう感想が返ってくる。その反応を楽しみながら授業に入る。

「猫」という作品は指導しにくいと思われがちな作品だが、生徒の読後感は比較的良い。今回はグループ学習を多く取り入れ、生徒自身が互いの読みを交換することによって読み深めるという方法で授業を進めた。一グループは四人までである。

この作品の魅力を、生徒の読みの変容を見取りながら考えてみたい。

二　学習の目標

○二匹の猫の性格を読み比べ、象徴されている生き方を考える。

○主人公の心の葛藤を読み取り、自分の意見を持つ。

三　指導の流れ〈全四時間〉

第一時

〈導入〉学習目標と流れの確認。

・「猫」のイメージと作者紹介。

・作品に興味を持つ。

〈展開〉作品全体を通読。

・初発の感想を発表し合う。

〈語句の確認〉難語句の意味調べ。

第二時（グループ学習）

・二匹の猫を読み比べ、違いを短い言葉でまとめ表にする。

第三時（グループ学習）

・主人公ソフィアの二匹の猫に対する気持ちの変化を読み取る。

・ソフィアの心の葛藤をグループで考える。

第四時（個から全体へ）

・象徴的な表現に気づき、ソフィアのマッペに対する愛の形について自分の意見をもつ。

・ソフィアのそれぞれの猫に対する思いについて全体で話し合い、感想を述べ合う。

四　初発の感想より

○何を言いたいのかよくわからない。

○マッペは残酷な猫だ。しかし、ソフィアも乱暴だと思った。

○自分で飼うならなついてくれるスヴァンテのほうがいいと思った。

五　読後感より

○スヴァンテはソフィアにいっぱい愛を注いでくれる猫だった。マッペに少しも優しくされなかったソフィアの傷ついた心を埋める役割をしていたと思う。つまり、理想の猫だった。しかし、ソフィアの考えた理想は違っていた。「ずーっといいお天気ばかりだと、なんだか、つまらなくなってくるの。」という一言から、ソフィアは好かれるより好きになりたい人なんだと思った。

○授業中、みんなで考えたように「like」と「love」の違い、「理想」と「現実」の違いがこの話ですごくよくわかった。「恋」をすると失って初めて気づく「大切さ」があるのだ。

○ソフィアはマッペを強く愛しているからこんな複雑な思いになるのだと思いました。マッペを愛する気持ちが伝われればいいのに……。

○ソフィアが言っていたとおり「愛すれば愛するほど遠くに行ってしまう」という言葉は事実であり、私の心に残りました。

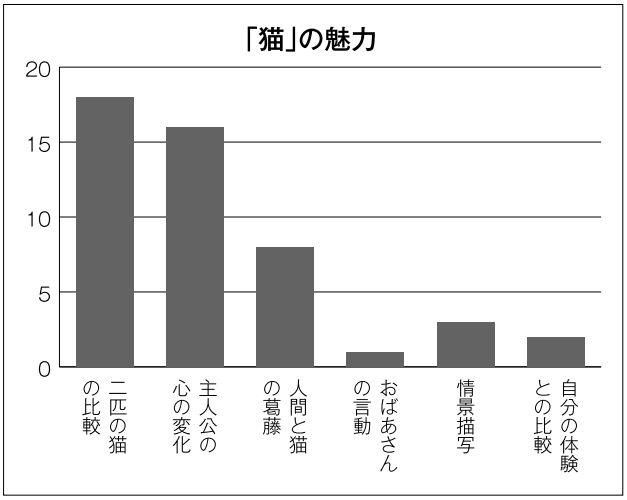
六　作品の魅力

授業後、この作品について生徒に簡単なアンケートをとった。すると約八十五パーセントの生徒が「おもしろい」「まあまあおもしろい」と答えた。その理由をグラフにまとめてみた。

二匹の猫の比較と主人公の心の変化に興味をもった生徒が多いことがわかる。生徒たちは「ソフィアの二匹の猫に対する愛の物語」としてこの作品を読み取った。スヴァンテに対する思いは「like」、一方、マッペに対する思いこそ「love」だというのである。青春真っ只中にある生徒たちには自身の「思い通りにならない思い」や、「相手に素直に伝えられない思い」を、ソフィアのマッペに対する苛立ちと重ねて読んでいたようである。

人間と猫の愛憎を語りつつ、人間のエゴや深い愛情が、美しいフィンランドの夏の景色の中で色鮮やかに展開されている……。これがこの作品の魅力ではないだろうか。そして、自分たちの現実に引き付けて深く読み込める作品や授業展開を生徒たちは期待しているのだ。

豊かな感性を育む作品の一つとしてこれからもこの作品と向き合っていきたい。



注

三省堂『現代の国語』三年所収

てらにし　ゆうこ　二十一世紀国語教育研究会会員。これまでの研究テーマは「主体的な読みを育てる指導の工夫」、「説明的文章を用いた情報活用能力の育成」など。